

# QFT

伊東利将

2020/7/6

## 1 レプトン同士の衝突

ここでは、電子と陽電子について考える。この衝突により、荷電レプトン  $l^+$  と  $l^-$  のペアが出来る場合を考察する。

$$e^+(\mathbf{p}_1, r_1) + e^-(\mathbf{p}_2, r_2) \rightarrow l^+(\mathbf{p}'_1, s_1) + l^-(\mathbf{p}'_2, s_2)$$

という過程はセクション 7.4 で扱ったが、その Feynman 振幅は

$$\mathcal{M}^{(2)}(e^+e^- \rightarrow \mu^+\mu^-) = -ie^2 \bar{u}_\mu(\mathbf{p}'_2) \gamma^\alpha v_\mu(\mathbf{p}'_1) D_{F\alpha\beta}(p_1 + p_2) \bar{v}_e(\mathbf{p}_1) \gamma^\beta u_e(\mathbf{p}_2) \quad (1)$$

と書けることを以前導いた。これを僅かに修正したノーテーションで

$$\mathcal{M}(r_1, r_2, s_1, s_2) = ie^2 \{ \bar{u}_{s_2}(\mathbf{p}'_2) \gamma_\alpha v_{s_1}(\mathbf{p}'_1) \}_{(l)} \frac{1}{(p_1 + p_2)^2} \{ \bar{v}_{r_1}(\mathbf{p}_1) \gamma^\alpha u_{r_2}(\mathbf{p}_2) \}_{(e)} \quad (2)$$

と書くことにする。 $l$  と  $e$  はそれぞれレプトンと電子を表すラベルである。

$$X = \frac{1}{4} \sum_{r_1, r_2, s_1, s_2} | \mathcal{M}(r_1, r_2, s_1, s_2) |^2 \quad (3)$$

と置く。 $\gamma^{\alpha\dagger} = \gamma^0 \gamma^\alpha \gamma^0$  であることを用いると

$$\mathcal{M}^*(r_1, r_2, s_1, s_2) = -ie^2 \{ \bar{v}_{s_1}(\mathbf{p}'_1) \gamma_\beta u_{s_2}(\mathbf{p}'_2) \}_{(l)} \frac{1}{(p_1 + p_2)^2} \{ \bar{u}_{r_2}(\mathbf{p}_2) \gamma^\beta v_{r_1}(\mathbf{p}_1) \}_{(e)} \quad (4)$$

となるから、

$$X = \frac{e^4}{4(p_1 + p_2)^4} A_{(l)\alpha\beta} B_{(e)}^{\alpha\beta} \quad (5)$$

となる。ここで、

$$A_{(l)\alpha\beta} = \sum_{s_1, s_2} \{ \bar{u}_{s_2}(\mathbf{p}'_2) \gamma_\alpha v_{s_1}(\mathbf{p}'_1) \bar{v}_{s_1}(\mathbf{p}'_1) \gamma_\beta u_{s_2}(\mathbf{p}'_2) \}_{(l)} \quad (6)$$

であり、これは

$$\text{Tr} \left( \frac{\not{p}'_2 - m_l}{2m_l} \gamma^\alpha \frac{\not{p}'_1 - m_l}{2m_l} \gamma^\beta \right) \quad (7)$$

となる。この計算は 8.2 節で行っている。同様に

$$B_{(e)}^{\alpha\beta} = \text{Tr} \left( \frac{\not{p}_1 - m_e}{2m_e} \gamma^\alpha \frac{\not{p}_2 - m_e}{2m_e} \gamma^\beta \right) \quad (8)$$

$A_{(l)\alpha\beta}$  は計算すると

$$A_{(l)\alpha\beta} = \frac{1}{4m_l^2} (\text{Tr}(\not{p}'_2 \gamma_\alpha \not{p}'_1 \gamma_\beta) - m_l^2 \text{Tr}(\gamma_\alpha \gamma_\beta)) \quad (9)$$

となることが容易に分かる。更に  $\gamma$  行列の性質から変形して

$$A_{(l)\alpha\beta} = \frac{1}{m_e^2} \{p'_{1\alpha} p'_{2\beta} + p'_{2\alpha} p'_{1\beta} - (m_e^2 + p'_1 p'_2) g^{\alpha\beta}\} \quad (10)$$

となる。ここで用いた性質は

$$\text{Tr}(\gamma^\alpha \gamma^\beta) = 4g^{\alpha\beta} \quad (11)$$

と

$$\text{Tr}(\gamma^\alpha \gamma^\beta \gamma^\gamma \gamma^\delta) = 4(g^{\alpha\beta} g^{\gamma\delta} - g^{\alpha\gamma} g^{\beta\delta} + g^{\alpha\delta} g^{\beta\gamma}) \quad (12)$$

である。同様にして

$$B_{(e)}^{\alpha\beta} = \frac{1}{m_e^2} \{p_1^\alpha p_2^\beta + p_2^\alpha p_1^\beta - (m_e^2 + p_1 p_2) g^{\alpha\beta}\} \quad (13)$$

となる。これを代入して

$$X = \frac{e^4}{2m_e^2 2m_l^2 (p_1 + p_2)^4} \{(p_1 p'_1)(p_2 p'_2) + (p_1 p'_2)(p_2 p'_1) + m_e^2 (p'_1 p'_2) + m_l^2 (p_1 p_2) + 2m_e^2 m_l^2\} \quad (14)$$

が得られる。ここで、

$$p_1 p'_1 = p_2 p'_2 = E^2 - p p' \cos \theta \quad (15)$$

$$p_1 p_2 = E^2 + p^2 \quad (16)$$

$$p_1 p'_2 = p_2 p'_1 = E^2 + p p' \cos \theta \quad (17)$$

$$p'_1 p'_2 = E^2 + p'^2 \quad (18)$$

$$(p_1 + p_2)^2 = 4E^2 \quad (19)$$

であるとき、 $E \geq m_\mu$  のときは  $p = E$  とする近似が使えて、さらに  $m_e$  は無視できる。この近似を用いると

$$\left(\frac{d\sigma}{d\Omega}\right) = \frac{\alpha^2}{16E^4} \left(\frac{p'}{E}\right) (E^2 + m_l^2 + p'^2 \cos^2 \theta) \quad (20)$$

となり、

$$\sigma_{\text{tot}} = \frac{\pi\alpha^2}{4E^4} \left(\frac{p'}{E}\right) \left(E^2 + m_l^2 + \frac{1}{3}p'^2\right) \quad (21)$$

と全断面積は計算される。 $E \gg m_l$  のとき

$$\left(\frac{d\sigma}{d\Omega}\right) = \frac{\alpha^2}{16E^2} (1 + \cos^2 \theta) \quad (22)$$

となり、

$$\sigma_{\text{tot}} = \frac{\pi\alpha^2}{3E^2} \quad (23)$$

と全断面積は計算される。電子陽電子から  $\mu$  粒子  $\tau$  粒子を生成する幅広いエネルギー領域で調べられている。図 8.2 と図 8.3 ではその実験結果が示されている。このシステムでは仮想光子のエネルギーは  $2E$  であるが、それは  $\frac{\hbar}{2E}$  のオーダーの時間スケールであることを仄めかしており、対応する距離スケールが  $\frac{\hbar c}{2E}$  であることを意味している。 $E \simeq 15$  GeV では  $7 \times 10^{-3}$  fm のオーダーの距離に対応する。このときこれは非常に小さな値なので、電子、 $\mu$  粒子、 $\tau$  粒子は点であると考えられる。